中世神社本殿の形式分類とその地域的分布 (下)

正 会 員 宮 沢 智 士*

前稿において、研究目的・意義をのべ、本殿を切妻造平入、切妻造妻入、入母屋造、その他に大別し、このうち切妻造平入本殿の形式分類、その地域的分布についてのべた。これに引続いて本稿では切妻造妻入以下の本殿形式についてのべ、最後に各形式のあいだに関連があるか、あるとすればどのようなものか考えてみたい。

3.2 切妻造妻入の本殿

春日造・隅木入春日造など春日造形本殿、大社造、住吉造などが切妻造妻入の本殿である。ただし、大社造、住吉造は中世までさかのぼる遺構がほとんどないので、ここではふれず、つぎの特殊形式・その他の本殿の項でのべることにする。

(4) 春日造形本殿

妻入の切妻造の正面に片流の庇をつけ、母屋と庇の屋根をたくみに処理した社殿およびこれに類似する社殿を一括して、仮に春日造形本殿とよぶことにする。この形式の本殿は中世全本殿遺構の約2割をしめており、流造について数が多い。

春日造形本殿は大多数が一間社で、少数の三間社が存在する。これらは、母屋と庇の納りに隅木を用いないもの(春日造[形式C]とする)と、隅木を用いるもの(隅木入春日造[形式D]とする)とに大別できる。[形式C]、[形式D]は、さらに表-3のように細分できる。一方平面形式をみると、[形式C]では方1間の平面を原則とするが、[形式D]には方1間のもののほか、奥行に長い平面のものがある。岡山・熊野神社本殿は桁行2間、山口・石城神社本殿は桁行3間の例である。春日造形本殿にみられる方形平面と奥に長い平面とはこの形式の系譜を考えるうえで重要であるとおもわれるが、ここでは分類上方形のほかに、奥に長い平面のものをあることをしるしておくにとどめる。

さて春日造形本殿の分布についてのべよう(図-21)。春日造が春日大社を中心にして奈良やその周辺に多く分布していることは周知の事実である。ただし春日造[形式C]と隅木入春日造[形式D]の分布の関係については明らかにされていなかった。この両者の分布をしらべると、この間にはっきりした境界のあることが認められる。すなわち、[形式C]は京都府南部、奈良県、大阪府、和歌山県に分布し、この範囲内に[形式D]は分布せず、[形式D]は[形式C]の分布範囲をとりかこん

表-3 春日造形本殿の分類

形式	細分記号	説 明	中世遺構例	分 布 地 域
春日造 「形式C」	[C-1]	春日大社本殿、同若宮社などにみられる形式で、母屋前方の破風がそのまま庇の下まできいているもの。	三仏寺納経堂(図-10) 松尾神社本殿(山城町) (旧春日若宮)	奈良県北部、京都府南部、和歌山県北部、大阪府に限られる。 (ただし三仏寺を除く)
	[C-2]	円成寺春日堂・白山堂など、もっとも多くみられるもので、母屋前方の破風が庇の下まで出ず、庇のタルキを納めるために、別にアオリ破風を用いるもの。	円成寺春日堂・白山堂(図-3) 丹生都比売神社本殿 意賀美神社本殿	
	[C-3]	正面は[C-2]と同様であるが、背面を切妻造でなく、入母屋造とするもの。	泉穴師神社境内社住吉神社本殿(図-11)	
隅木入春日造 「形式D」	[D-1]	隅木入春日造と一般によばれているもので、母屋と庇のタルキの納りに隅木を用いているもの。	山梨・熊野神社本殿 宇太水分神社本殿 石城神社本殿(図-14)	栃木県、山梨県、長野県、滋賀県、奈良県南部、和歌山県南部、兵庫県、岡山県、山口県
	[D-2]	正面は[D-1]と同様であるが、背面を切妻造でなく、入母屋造とするもの。[C-3]に対応する。	鶴林寺行者堂	
	[D-3]	正面入母屋造向拝付、背面切妻造とするもの。	山梨・窪八幡神社本殿 社本 高良社(図-12) 山梨岡神社本殿	山梨県

で、その外側に分布している。この境界をしるす。

北のほうからみてゆこう。滋賀県には春日造は大笹原神社境内社大笹原神社本殿と地主神社本殿の2棟があり、ともに[形式D]である。東にまわって、三重県に入ると、春日造の中世遺構はないが、桃山時代の高倉神社境内社春日神社本殿は[形式D]、大村神社宝殿は入母屋造妻入の1間社であって、ここにも[形式C]は分布していない。奈良県に入って、県北部は[形式C]にかぎられるが、南にいった、宇太水分神社本殿、同末社春日神社本殿はともに[形式D]であり、吉野水分神社本殿(慶長9年)は中央に一間社隅木入春日造、左右に三間社流造において、相の間で連結した形式をとり、全体で九間の流造となっているが、中央の一間社の軒は隅木入春日造と同様の納め方をする独特のものであり、これも隅木入春日造の存在を知る参考になろう。このように奈良県南部には[形式D]が分布しているとみられる。つぎに和歌山県では紀川筋は[形式C]が分布し、金屋町の白岩丹生神社がその南限をしめしている。その南にある広八幡神社摂社若宮社本殿、同高良神社本殿は[形式D]であるし、時代は江戸時代に降るが、西牟婁郡南部川村の須賀神社本殿もやはり隅木入春日造である。大阪府には[形式D]はなく、兵庫県に入ると、一

* 奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部
(昭和43年4月16日日本稿受理・討論期限昭和44年1月末日)

乗寺弁天堂・護法堂，円教寺護法堂，鶴林寺行者堂は〔形式D〕であり，三田市の御霊神社本殿，天津神社本殿は隅木入春日造とよく似た正面をもつ入母屋造妻入の本殿である。〔形式C〕の遺構はない。京都府では春日造は南部にあって，いずれも〔形式C〕である。

以上のように春日造形本殿の〔形式C〕と〔形式D〕とははっきりした境界をもって分布している。〔形式C〕は奈良を中心にした比較的狭い範囲に分布しており，これ以外の地域には〔形式D〕が分布している。〔形式D〕のうち，正面入母屋造向拝つき，背面切妻造とする〔D-3〕は山梨県のみ分布しており，一地方色とみることができよう。〔形式D〕は中世遺構についてみれば，北は福島の熊野神社本殿があり，栃木県，山梨県，長野県北部に分布し，近畿では滋賀県，奈良県，兵庫県に分布し，西では岡山県，さらに山口・石城神社本殿にまでわたっている。ただし，鳥取・三仏寺納経堂は小規模な見せ棚造の隅木の入らない春日造であって，ただ一つの例外となっている。この本殿はこけらぶきであって，その母屋と庇の屋根のふき納りを注意してみると，母屋部分と庇部分は別々にふかれているし，また庇下に見える破風には打越タルキが納まらず，破風下に増木をしてタルキをおさめているなど，原始的な要素がみられる。

春日造形本殿の分布状況は，江戸時代に入ると変化す

る。春日造〔形式C〕の分布の中心地である奈良盆地にも隅木入春日造があらわれる。大和郡山市の薬園八幡宮本殿はその例である。奈良・談山神社の現本殿は三間社隅木入春日造で，嘉永年間の造替であり，これと同じ形式の旧本殿は境内にあり，東大寺本坊内にも移築されており，江戸時代初期まではさかのぼる。さらに永禄造営のときの指図も現状と同形式とみられる。するとこの形式は中世まで遡ることになり，宇太水分神社本殿とともに隅木入春日造の奈良県における北限となる。

また地方では高知の鳴無神社本殿（寛文3）は小規模な三間社春日造であって，隅木を用いていない。

3.3 入母屋造本殿

入母屋造本殿という名称は，流造や春日造のように一定の本殿形式をさすものでなく，屋根が入母屋造である本殿を一括している。したがってそのなかには成立事情が異なるとおもわれるもの，形態が異なるものなどさまざまなものがふくまれている。量的には中世本殿遺構の約1割をしめており無視できない。

まず，入母屋造本殿にはどのような形式のものがあるか平入と妻入にわけてしるそう。

（5）入母屋造平入の本殿

正面柱間1～3間，5間，11間のものが実在する。

一間社：中世遺構は京都府精華町の春日神社本殿，岡

図一10 鳥取・三仏寺納経堂〔C-1〕

〔中〕 図一11 大阪・泉穴師神社境内社住吉神社本殿〔C-3〕

〔右〕 図一12 山梨・窪八幡神社末社高良神社本殿〔D-3〕

図一13 奈良・円成寺春日堂〔C-2〕

図一14 山口・石城神社本殿〔D-1〕

山・本蓮寺番神堂中祠、福岡・太宰府天満宮末社志賀神社の3棟である。方1間の母屋の前面に向拝をつける。

二間社；中世遺構は群馬・雷電神社末社八幡宮稻荷神社社殿、大津市の春日神社本殿の2棟である。正面2間の母屋の前面に向拝をつける。

三間社；つぎのように細分できる。

五間社・十一間社；岡山・吉川八幡宮本殿は正面5間の母屋の前面5間いっばいに庇をつけたもので、形式[E-1]に分類できよう。高知・土佐神社本殿は正面5間の母屋の前面3間に向拝をつける。平面は3間×1間の内陣がとりかこんだ形式をとっている。広峯神社本殿は正面11間であり、一種の連結形式の本殿である。

以上の各々の分布については、遺構がすくなく、はっきりしたことはわからないが、一つ注目されるのは、大阪府下の中世では三間社流造の遺構がなく、三間社は入母屋造平入の3棟[形式E-1]に限られることである。この形式がこの地において有力な本殿形式の一つであったと考えられる。

入母屋造平入の本殿の三間社を4形式に細分したが、一間社、二間社などはこのどれかの形式に組み入れられるだろうか。向拝のつかない[E-2]、1間4面堂の[E-4]でないことは明らかである。一間社、二間社では[E-3]の形式はとれないが、母屋の幅よりせばめた庇をつけているものと、母屋の幅いっばいに庇をつけてい

表-4 入母屋造平入三間社の分類

細分記号	説 明	中 世 遺 構 例
[E-1]	横長平面で前方に向拝3間をつけたもの。平面形式は三間社流造[A-1]と同じ。	久麻久神社本殿(愛知) 錦織神社本殿(大阪) 烏帽子形八幡神社本殿(大阪・図-15)
[E-2]	横長平面で向拝がつかないもの。	古熊神社本殿(山口)1棟
[E-3]	ほぼ正方形平面で、前方に向拝1間をつけたもの。平面形式は三間社流造向拝つき[形式B]と同じ。	大笹原神社本殿(滋賀) 郡山八幡神社本殿(鹿兒島)
[E-4]	1間4面堂の形式をとった方3間堂の前面に向拝1間をつけたもの。	御上神社本殿(図-16) (滋賀)1棟

るものとを区別すれば、前者は[E-1]とはいきれないが、しかし外観は[E-1]にもっとも似ている。

(6) 入母屋造妻入の本殿

正面柱間1間のもの、3間のものが現存する。

一間社；秋田・古四王神社本殿(図-18)、兵庫・天津神社本殿がある。前者は方1間の母屋の前面に唐破風の向拝をつけている。後者は正面1間、側面2間の母屋に向拝をつけたもので、正面は隅木入春日造によく似る。

三間社；兵庫三田市の御霊神社本殿、岡山・中山神社本殿(図-17)がある。前者は正面3間、側面・背面2間であるが、正面の中間の2本の柱は隅柱より細く、両脇間がせまいので、全体の釣合は三間社よりは一間社に近い。後者は正面・側面とも3間で規模が大きい。前面

に唐破風の向拝をつける。

これら入母屋造妻入の本殿の分布については遺構がすくなく、はっきりしたことはわからないが、近世の遺構を加えてみると次のような傾向を知ることができる。

(1) 妻入の一間社である古四王神社本殿は入母屋造の屋根が高く、唐破風の向拝をつけているところに外観上の特徴をみだされる。これと似たものに江戸時代の遺構であるが、同じ秋田県の三輪神社境内社須賀神社本殿(正面3間)がある。このような入母屋造妻入の本殿を秋田地方の地方色とみることができないだろうか。

(2) 入母屋造妻入の天津神社本殿(正面1間)、御霊神社本殿(正面3間)の正面は隅木入春日造ときわめてよく似ており、その分布が春日造[C-2]が分布する範囲のすぐ周辺に存在していることは注意を要する。そして、隅木入春日造、泉穴師神社境内社住吉神社本殿のように正面春日造・背面入母屋造、鶴林寺行者堂のように正面隅木入春日造・背面入母屋造の本殿の存在を考えると、この入母屋造本殿の成立について、春日造との関係をおもわせる。

(3) 入母屋造妻入の三間社で岡山県にある中山神社本殿、総社本殿(江戸時代)は規模が大きく、正面に唐破風の向拝をつけており、この地方の特徴をしめしている。ただし、規模の違うことを除けば、中山神社本殿は古四王神社本殿と外観はよく似ている。この両者が直接関係あるか否かはわからない。

入母屋造妻入の本殿は遺構は多くないが、以上のように秋田の古四王神社本殿、兵庫の御霊神社本殿、天津神社本殿、岡山の中山神社本殿を中心とした3グループに分類することも可能とおもわれる。

なお、入母屋造本殿には御上神社本殿のように一間4面堂の形式をもった必然的な入母屋造と、意匠上入母屋造にしたものがあることは注意しておく必要がある。

3.4 特殊な形式、その他の本殿

これまで流造、春日造、入母屋造本殿など類型化した本殿についてのべてきた。これに対し、ここでは特殊な形式、あるいは同一形式の少い本殿についてのべる。

(1) 岡山・吉備津神社本殿(図-19)；屋根形式、平面形式とも特殊である。屋根は比翼入母屋ともよばれる形式で、側面に千鳥破風をつならべている。平面は流造を基本として、周囲に庇、孫庇を複雑につけたものと解され、また稲垣博士による新説がある²⁾。

(2) 広島・厳島神社摂社天神社本殿；桁行梁行ともに3間の入母屋造妻入で、向拝はなく、背面に庇をつけている。平面、外観ともきわめて特殊な本殿である。

(3) 広島・厳島神社摂社大国神社本殿；桁行3間、梁行4間の切妻造妻入で、前面の柱間を持ちはなし、向拝をつけていない。平面、外観とも特殊である。

(4) 奈良・大神神社摂社大直祢子神社社殿；桁行5

15

16

17

18

19

20

図—15 大阪・烏帽子八幡神社本殿 [E-1]

図—17 岡山・中山神社本殿

図—19 岡山・吉備津神社本殿

図—16 滋賀・御上神社本殿 [E-4]

図—18 秋田・古四王神社本殿

図—20 奈良・宇太水分神社本殿（3棟）

間、梁行5間の入母屋造平入の建物で、仏堂を転用したもので、特殊なものである。

(5) 長野；小管神社奥社本殿；桁行4間、梁間4間の入母屋造平入、懸造の建物で、後部は岩山に接している。本殿として特殊である。

つぎに、古代に成立し今日にもその形式を伝えている大社造、神明造、八幡造、住吉造、日吉造などは、式年造替や後世の建てかえのため、中世まで遡る遺構はほとんどない。ただ、大社造の神魂神社本殿（島根）が中世の遺構と考えられている³⁾のみである。中世の遺構はなくとも、これらの形式が、中世に存在していたことは明らかである。

なお近世初期の神明社本殿（長野県白馬村）は棟持柱はないが、切妻造平入の小社殿であって、神明造と似た

ものである。

3.5 複数棟よりなる本殿（図—20）

春日大社本殿は同形の春日造が4棟並立して本殿を構成している。大阪・建水分神社本殿は、中央に春日造、左右に流造を配し、あわせて3棟よりなっている。このように複数の社殿で構成される本殿が少からず存在している。これまで行ってきた分類は複数棟からなるものも、一棟ずつにわけて分類してきたが、ここでは複数棟よりなる本殿にどのようなものがあるか知るそう。複数棟の本殿は同形のものからなるものと異なった形式を組合せたものとに大別できる。これを表—5に示す。複数棟の本殿は春日造形の本殿に多い。

なお、この問題を考えるうえで、本殿は1棟であるが、本殿の両脇に境内社を配しているものは参考にな

図-21 中世神社本殿の形式分布図

る。奈良・十六所神社では一間社春日造の本殿をおき、両脇に小形の一間社春日造の境内社を配置しており、五条市の御霊神社では、一間社春日造の本殿の両脇に小形の一間社流造を配置している。また長野県大桑村の白山神社は1間社流造の本殿の横にほぼ同形の境内社3棟を並べ、あわせて4棟の流造がならんでいる。

以上のような、複数棟よりなる本殿や本殿のわきに境内社を配置するものは、その成立過程、意匠の面からみても興味があり、別の機会に論じたいとおもう。

4. 要 約

以上の考察によって明らかになったことを要約する。

中世の神社本殿を遺構にもとづいて分類し、切妻造平入、切妻造妻入、入母屋造、その他特殊な形式とした。

4.1 切妻造平入の本殿 流造・両流造・切妻造平入向拝つき本殿などがふくまれる。流造は量的に多いが、両流造、切妻造平入向拝つき本殿は少い。

(1) 流造は上下賀茂神社本殿で代表されるように三間社が主要な位置をしめている。量的には、一間社は三間社をうわまわるほど多いが、摂社・末社・境内社など簡単な小社殿の形式として採用されている場合が多い。

(2) 三間社流造は神谷神社本殿のような普通の形式と、その一変形とみられるもので、園城寺新羅善神堂のように、流造の庇の前方にさらに向拝をつけたものとに大別できる。

表—5 複数棟よりなる本殿

同形の社殿を並立する	春日造	2 棟	{ 円成寺春日堂白山堂, 博西 (奈良)
	"	3 棟	丹生官省符 (和歌山)
	"	4 棟	丹生都比売 (和歌山)
	隅木入春日造	2 棟	{ 熊野 (山梨) 円教寺護法堂 (兵庫)
	"	3 棟	宇太水分 (奈良)
異なった形式の社殿を組合せる	流 造	3 棟	布施 (滋賀)
	春日造 (中) 流造 (左右)	1+2 =3 棟	建水分 (大阪)

(3) これらの形式は地域的な特徴をもって分布している。向拝つきのものは滋賀県に特に多く分布し、中世にかぎれば滋賀県の三間社流造はすべて向拝つきである。滋賀県以外では北陸地方に比較的に多い。兵庫県、京都府、奈良県などでは向拝つきでないものが主流である。

(4) 向拝のつかない形式のものは、さらに3つに細分できる。①普通の形式、②向拝はつかないが平面は向拝つきのものに似ており、庇部分を一室とするもの、③一間社2社を相の間で連結した形式のものである。②は愛知県など東海地方に多い。

(5) 五間社流造も三間社と同様に分類できる。九間社、十一間社など正面柱間の多いものに連結社殿が多い。

4.2 切妻造妻入の本殿 春日造、隅木入春日造など春日造形本殿がおもなものである。

(1) 春日造と隅木入春日造の地域的分布はきわめてはっきりした境界がある。春日造は奈良県北部、京都府南部、大阪府、和歌山県北部に分布しており、隅木入春日造はこの地域の外側に分布し、東は栃木県、山梨県、長野県、近畿で滋賀県、奈良県、和歌山県、兵庫県、西は岡山県、山口県などにある。

(2) 春日造形社殿には春日造、隅木入春日造とわききって分類できず、むしろ入母屋造妻入の本殿に似た形式のものがある。これらは入母屋造妻入のものをふくめて、春日造と隅木入春日造との境界をなす地域に多い。

(3) 春日造、隅木入春日造など春日造の名でよばれているが、すべてが春日大社と関係しているものでなく、紀伊、熊野三山との関係も重要である。これについては別に研究の機会をもちたい。

4.3 入母屋造本殿 入母屋造本殿を平入と妻入のものにわけた。

(1) 平入の三間社は4形式に分類できる。このうち大阪、錦織神社本殿で代表される形式[E-1]、鹿児島、郡山八幡神社で代表される[E-3]の平面はそれぞれ流造の三間社[A-1]、[B]と同じであって、流造との関連をおもわせる。

(2) 妻入のものは秋田、兵庫、岡山など地域によって分類ができる。このうち兵庫の御霊神社本殿、天津神社本殿は、中間に鶴林寺行者堂、泉穴師神社境内社住吉神社本殿など春日造形本殿の変形とみられる形式をおき、さらに春日造が分布する範囲のすぐ外側に分布するという条件を考えると春日造形本殿と密接な関係があるとおもわれる。

4.4 以上のほか特殊な形式、類例の少い本殿があり、また1様でなく複数棟よりなる本殿がある。

本殿の外観上、千鳥破風、唐破風などの存在また祭神、神道の流派と社殿形式との関係は重要であるので、今後の課題としたい。

注 1) 福島県喜多方市熊野神社本殿は中世の部材を残すが、改造が甚しい。伊藤延男博士の御教示による。

2) 稲垣栄三「吉備津社本殿の形式」日本建築学会昭和43年度大会学術講演梗概集

3) 神魂神社本殿の建立年代を福山博士は天正11年とする。「山陰の神社建築」仏教芸術 No. 60, 1966, 4月

other. Particular strong irregularity seen in December of 1959 corresponds with the change of building codes.

S-I Factor is the seasonal and irregular factor calculated approximately by Census Method II-XII, Dept. of Commerce, Bureau of the Census, U.S.A.

U.D.C. 72.03 : 726.139.52

**ON THE FORM OF SHRINES MAIN HALLS AND THEIR GEOGRAPHICAL
DISTRIBUTION IN THE JAPANESE MIDDLE AGES (NO. 2)**

(See Trans of A.I.J. No. 151 page 71)

by SATOSHI MIYAZAWA, Nara National Research Institute of
Cultural Properties, Member of A.I.J.

U.D.C. 72.03 : 726.134.3 : 69.02

**ON ORNAMENTAL DETAILS OF THE ZEN-STYLE ARCHITECTURE
OF THE EARLY MIDDLE AGES (3)**

(See Page 67)

by KINYA SEKIGUCHI, Lecture of Yokohama National Univ.
Member of A.I.J.